

書評

岩波新書，昭和60年

押田勇雄 著

「人間生活とエネルギー」

評者 齋藤雄志*

Takeshi Saitoh

本書は、随所に興味ある数値が散りばめられていて読物として大変に面白いばかりでなく、エネルギー問題を考える上で貴重な示唆が数多く含まれている。著者はごく最近まで上智大学理工学部におられて太陽エネルギーの研究を長く続けておられた方であり、著者が長い間エネルギー問題について考えてきたことのエッセンスが本書に織り込まれているといっても過言ではないであろう。本書は岩波新書としての性格から当然のことながらかなり広い読者を対象として平易な文体で書かれたものであるが、本研究会の読者のようなエネルギー問題あるいは資源問題の専門家が読んでみても考えさせられる点が多いのではないかと思う。本書は、エネルギー問題に関する日本語で出版された優れた著作の一つであり、広く推奨できると思う。

本書は基本的に2つの視点から書かれている。著者の言葉を借りれば、第一の視点は、先進国と発展途上国の関係という横の視点であり、かなり力点をおいて書かれている。著者は、世界全体の視点からはエネルギーは不足していることもなく、また高価格であることが問題なのでなく各国間の不平等が最大の問題であり、資源という立場からは先進国はエネルギーを使い過ぎていてと力説している。第二の視点は子孫のためのエネルギーという縦の視点である。これは将来のエネルギー源の選択や化石燃料の大量消費問題にかかわっている。その意味で本書は長期的マクロ的視点で書かれている。

エネルギーの原点であるバイオマスエネルギーを軸にした世界各国のエネルギー利用状態の比較、エネルギー利用の歴史の変遷から見たエネルギー危機の位置づけ、将来の主力エネルギー源と考えられている原子力の問題点、太陽エネルギーの可能性、消費側からみたエネルギー問題などが主な内容である。

一般にエネルギーに関する著作や報告書ではたてま

えの部分しか述べられていないことが多いが、本書では素朴な表現ながらも厳しい意見が随所に述べられている。まず第一に著者は原子力の利用に関してかなり批判的だが、核融合についても「成功しそうな研究」、水素エネルギーに対してもほとんど本格的に使われることはないのではないか懐疑的である。著者はなによりも世間一般に広くある「21世紀のなかばになると太陽エネルギー利用技術と核融合技術がほぼ完成し人類は尽きることのない膨大なエネルギーを手に入れることができる」というストーリーに賛成してない。

著者の研究分野である太陽エネルギーに関する意見もきわめて説得的である。太陽エネルギーのように希薄な分散型エネルギーを太陽発電所のように集中型として使うのは誤りであり、発想を変えないと太陽エネルギーは使えないとする主張は、太陽エネルギーに関する研究の基本的方向を示唆するものである。

もちろん、本書の一部の意見に反対する読者も数多くおられることも確かであるが、筆者の意見の健全性に対する賛同者も案外多いのではないかと思う。

定価 430円



* 専修大学経営学部教授